猫蓑通信

第115号
特大号
令和四年
（2022年）
2月25日発行
（年4回発行）

この二年

鈴木了斎

心ならずもさまざまな制約を受けたこの二年余り、私たちも二年間に八回のはずの猫蓑会例会のうち二回（令和二年藤祭例会と令和三年初懐紙）を中止せざるを得ませんでした。また年に二回ずつのはずの正式俳諧を、二年にわたって一度も興行することができませんでした。

とはいえ、都合六回の例会と、二回の同人会は例年通り開催することができました。また各地の多くの実作会も、参加人数がやや減りつつもほぼ継続して開催され、朝日カルチャーセンター新宿の連句講座も、休止は三ヶ月間だけで済みました。またその間、必ずしもその対策が目的ではありませんでしたが、Zoomを使った「猫蓑会リモート」を定期開催できるようになり、普段なかなか同座の機会のない遠方の仲間とも、実際の同座に近い感覚で一緒にリアルタイムの連句を楽しめるようになりました。

こうした経験を通して、座の文芸というものが私たちにとっていかに大切かを、あらためて身に沁みて感じさせられた二年間でした。

ようやく、ウイルス病の流行にも収束の見通しが立ちつつあるように思えますが、この間、国内的にも国際的にもさまざまな分断が深まり、それはこの後も長く尾を引きそうです。

歴史を振り返ると、初期の連歌が盛り上がった院政時代、二条良基が活躍した南北朝時代、宗祇が活躍した戦国時代初期、どれも典型的な乱世でした。芭蕉が活躍した江戸時代初期も、戦国の不穏が収まり切れていませんでした。

たとえば、応仁の乱の東西両軍の大名もその家中も、多くが宗祇の連歌の弟子でした。そういう時代にあって、表面上の利害対立を超え、より深いところで人と人を結びつけ、社会的な傷を癒す働きを連歌系文芸が持っていたからこそ、乱世はその隆盛の時代でもあったのでしょう。宗祇の弟子の宗長の日記からは、そうしたことを如実に読み取ることができます。

さりとて、肩肘を張る必要はありません。これからも私たちがますます連句を楽しみ、また研鑽を積むことが、ささやかながらそうしたことにもつながってくれればと思います。

最後になりましたが、この間、この猫蓑通信の刊行が滞り、発行回数が少なかったことを深くお詫びします。今後はそういうことのないよう努めますので、何卒ご容赦ください。

●目次●

▽この二年　鈴木了斎　1
◎第百五十五回例会
令和三年四月春季例会　二十韻五巻　2
◎令和三年亀戸天神社奉納俳諧之連歌二十韻　3
▽正式俳諧後記　大島洋子　4
◎第百五十三回例会
令和二年七月猫蓑会総会　歌仙　五巻　5
◎令和元年～二年度　正式俳諧配役　7
◎第百四十六回例会
平成三十年猫蓑会総会　歌仙　七巻　8
▽二条良基に学ぶ　11
◎第四回猫蓑会リモート二十韻四巻歌仙一巻　12
◎第三回猫蓑会リモート　二十韻四巻　14
◎第二回猫蓑会リモート　二十韻三巻　15
◎第三十五回国民文化祭みやざき2020
連句部門受賞作品三巻
宮崎県教育委員会教育長賞
歌仙「海人の裔」　石川　葵　捌　16
日南市議会議長賞
歌仙「紅兆す」　西田荷夕　捌　16
ジュニアの部宮崎県連句協会奨励賞
表合せ六句「ドレミファソ」平林香織　捌　17
▽連句に出会ってくれてありがとう　平林香織　17
◎令和三年えひめ俳口全国連句大会
入賞歌仙三巻
松山市文化協会長賞
歌仙「猫車」　鈴木千惠子　捌　18
俳口賞
歌仙「緑陰に」　高塚　霞　捌　18
俳口賞
歌仙「天平の鴟尾」　橋本枯野　捌　19
▽武生連句の会の三人組として　橋本枯野　19
▽事務局だより　20

第百五十五回例会　令和三年
春季例会作品　二十韻五巻

春嶺の座

二十韻「遥拝の」　本屋良子　捌

遥拝の亀戸天神藤の波　良子
清明の気の満つる前庭　ひろみ
端座して山鳥の声聴くならん　吉文
ミシン手入れは懇ろにする　敦子
ウ アトリエの螺旋階段月を待つ　純子
明日楽しみな秋の野遊　秀樹
真菰咲く小流れはさみ交はす文　吉
焦がれ焦がれて胸に棲む鬼　み
ひと息にウオッカ呷りバーを去り　純
野良犬すわる電柱の下　吉
ナオ 桟橋が濡れて港の遠汽笛　み
サマーコートのデカプリオ佇つ　吉
夏月に夢の尼僧の名は言へず　樹
秘めたる恋を自画像に描き　吉
長考の末に打ちたるこの一手　敦
あまびゑ信仰冬ざれの町　仝
ナウ 着実な脚の運びよ名ランナー　み
誘ひ合はせてゲームする子ら　純
弦楽の四重奏聞く花の陰　樹
落暉の方へふらここを漕ぐ　執筆

連衆　江津ひろみ　永田吉文　武井敦子
近藤純子　青木秀樹

春園の座

二十韻「懶夢より」　鈴木美奈子　捌

懶夢より醒むれば春の別れかな　美奈子
弥生の川を宇宙船行く　了斎
畑打はＥＤＭのリズムにて　たけを
ウッドデッキで苦き珈琲　あき子
ウ 寝ころんで月の光と薔薇の香と　江灯
腕をのばすとそこにゐる君　斎
突然に視線からませスパークす　あ
首都の一帯すべて停電　斎
盲導犬ひたと止まつて動かざる　あ
キリスト像の前で悴む　を
ナオ 剥き出しの札束隠す冬帽子　仝
木樽の並ぶ暗き隧道　灯
追つて来る夫から逃げて二人旅　斎
捨てぬ恋文ひとつだけあり　仝
酉の刻の鐘にかたぶく下弦月　あ
閻魔蟋蟀そこここで鳴く　仝
ナウ ゆるされよ無邪気な老の濁酒　奈
赤岳のぞむ邸宅の主　を
朝陽受け光の海へ変はる花　斎
立つたまま漕ぐ古きぶらんこ　灯

連衆　鈴木了斎　山中たけを　岩崎あき子
伊藤江灯

苗田の座

二十韻「風やはらか」　鈴木千惠子　捌

風やはらか徐行のバスが角曲がる　千惠子
巣立鳥発つ図書館の軒　霞
春暖炉琥珀の欠片のぞきゐて　肇
前のボタンをきつちりとかけ　弘子
ウ シャガールの夢にただよふ青き月　志保子
万聖節の魔女に魅せられ　肇
村芝居夫の挙動が気にかかり　仝
棋士の目配り四方八方　霞
北極点地軸と地表出合ふとこ　保
観測船のコック忙し　霞
ナオ 署名だけ自筆で入れる夏見舞　肇
会話のあとに誰だつけはて　弘
骨格を確かめるごとおよぐ指　肇
珍陀の酒に肌の艶めく　千
月冴ゆる砂漠を姫のお輿入れ　霞
リボン結んで歌ふ童謡　仝
ナウ 本日は休演とある掲示板　肇
空缶ひとつごみ箱の中　霞
デゴイチの汽笛に花の旅続く　弘
遠く近くに田返しの人　保

連衆　高塚　霞　宇田川肇　市野沢弘子
北龍（きたきみ）志保子

潮干潟の座

二十韻「消えぬ航跡」　荒木鑑　捌

うたかたの消えぬ航跡春惜む　鑑
　磯のみるめに浸すくるぶし　孝子
菜飯茶屋そろひ半纏茶を入れて　通斉
　石のこけしに笑みの溢るる　有子
ウ　明易のほのかに白き野辺の月　徹心
　吾を呼ぶ如大瑠璃の声　有
尼僧にもふと想ひ出す恋のあり　孝
　映画のシーン真似る唇づけ　心
脱炭素地球の未来平穏か　鑑
　一帯一路夢のまた夢　斉
ナオ　遊牧の干肉を以て凌ぐ冬　孝
　べく杯で呷る燗酒　有
泥水の足を洗つてひと妻に　斉
　よべの姿を描くあぶな絵　孝
月浴びて浮かぶ旋律鍵盤へ　有
　秋の別れを送るベルリン　孝
ナウ　鬼やんま過りざわつく竿の先　心
　香具師の口上寄つてらつしやい　孝
歌舞伎座の余韻で歩く花の雨　斉
　暮れかぬる日をテレビ三昧　心

連衆　坂本孝子　菅原通斉　佐々木有子
佐藤徹心

弥生野の座

二十韻「春疾風」　松島待雪　捌

フルフェイスヘルメット無言春疾風　待雪
　九十九折には靡く藤房　忠史
鹿尾菜煮る醤油砂糖を目秤に　雅子
　夕べの縁に片す座布団　美代子
ウ　月涼し小さく聞こゆるお念仏　敏枝
　ビール呷つて告白をして　雅
ばりばりのキャリアウーマンはぐらかし　代
　見合写真はさらに修正　史
週末の二度寝近頃癖となり　枝
　外国暮らしもはや長期化　史
ナオ　草原を狼の群たむろせる　雅
　カンチェンジュンガ深々と雪　雪
いつだつてピンチのときはドラえもん　代
　案山子の笑顔彼とそつくり　史
老いらくの恋かもしれず月の窓　雅
　新刊上梓雁渡る頃　枝
ナウ　貨物車の時刻表から謎が解け　史
　好奇心こそ夢を育む　代
花らんまん友と昔を語らひぬ　枝
　大川麗ら口遊む歌　雅

連衆　根津忠史　武井雅子　山田美代子
箭内敏枝

令和三年四月二十三日
於　江東区芭蕉記念館

令和三年亀戸天神社奉納　俳諧之連歌二十韻

江戸会所継ぐ亀戸の藤まつり　秀樹
　角の豆屋の賑はへる春　千惠子
いかのぼり揚がる高さを競ひゐて　了斎
　インスタ映えの構図見極め　雅子
ウ　舷窓の月は波間を浮き沈み　転石
　医者の巡回稲架掛けの道　あき子
渡り鳥四十過ぎても独り者　孝子
　女誑しの手口あれこれ　健
色変はるマーブルチョコに魅せらるる　暁巳
　リモートワーク暮し変遷　富子
ナオ　茅葺の結に入れと誘はれて　鄭和
　代々続くとび職の裔　敦子
何もかも気にくはぬらし三歳児　美友紀
　ペットの兎月に舞ひ跳ね　吉文
抱かれて遠くなりゆく寒念仏　香織
　振り返らぬと決めた頤　一枝
ナウ　つづら折り峠の茶屋に婆ひとり　忠史
　汽笛の彼方煙たなびく　徹心
わが郷に日はまた昇る花の朝　良子
　光うららに醸す旨酒　執筆

この二十韻は、亀戸天神社神楽殿での、藤祭正式俳諧興行のために令和二年四月に巻いたものです。その年の藤祭が中止され、猫蓑会の藤祭例会も中止したため、翌令和三年五月に、このページ掲載の令和三年春季例会作品とともに亀戸天神社に奉納しました。次ページの「正式俳諧後記」をご参照下さい。この正式俳諧配役は7ページに記載しています。

正式俳諧後記 ◎リベンジの果たせぬまま

大島洋子

●夜分の電話

年号が令和に変わる年の春だったと思う。時刻は夜八時半過ぎ。猫蓑会事務局の佐々木有子さんから低い声の電話を頂いた。「実は……」芭蕉忌正式俳諧の執筆の依頼であった。

夜分の電話だったため、有子さんの母上路子さんのお体の具合でも悪いのかと、とっさに不安がよぎった。神楽坂連句会でご指導頂いていた路子宗匠を、私は連句の母とお慕いしていた。そうではないとわかった時、つい嬉しくなって、引き換えにどんな無理難題でもお引き受けしますと心の中で誓っていた。振り返れば連句のおかげで、良き仲間と楽しい時間を過ごさせていただいているのに、仕事が忙しい事を口実に、何の恩返しもしないままであった。実に連句道に反すると、この日を境に反省し、いざ執筆を全うする為の修行が始まった。

●共同作業

明雅先生が執筆をなさる写真を拝見したことがあった。昭和四十年代、まだお鬚もなく眼鏡もかけていない紋付き袴の凛々しいお姿である。連句は礼に始まり礼に終わり、連衆が心を合わせて一巻を捲き上げるという共同作業。先生はこの精神を表すものとして正式俳諧を位置づけられ、その作法を大切にされていた。

その手引書が受け継がれ、さらに先輩方の所作の貴重なＶＴＲも残されていることで、段取りを覚え自主練することができた。当日のお役は一紅庵良子宗匠はじめベテラン二十名あまり、二十韻の下俳諧でも多くの方のお手を煩わせた。さらに袴の着付けをしてくださる技ありの方々も加わり、誠に共同作業を実感する日となった。

●バーチャルゲーム

宗匠や老長が勢ぞろいし、花が生けられ、お香が焚かれると非日常の舞台の幕が開く。

そもそも連句自体が仮想世界、現代のバーチャルゲームの先駆けではないかと思う。しかもゲーム機もいらない、紙と筆だけあればよい。

令和元年十月　芭蕉忌・明雅忌興行正式俳諧にて

よくぞ三百五十年も前にこんな面白い遊びを考えてくれたものだ。このバーチャルの世界をさらにバーチャルに演じ切る正式俳諧。なりきってしまえば芭蕉様も、縁の庵に顔を出してくれるかも知れない……。

「付け」の声と衣擦れの音に続いて、「句あり」と声をあげ、歌膝という立膝で懐紙に書き込む姿は、俳諧師にとってのキメポーズだ。

この日の大役を済ませたあと、重鎮からのダメ出しが……。

連衆に礼をして、「御一同さま」と発声するところを何故か「おのおのがた」と言ったようだった。ここは今まで間違えたことがなかったのに……。芭蕉様ではなく赤穂浪士が降りてきてしまった。

●空気の共有

その年の十二月、中国武漢での感染から世界中を席巻したパンデミック。令和二年の亀戸天神社の藤祭正式俳諧中止。昭和六十二（1987）年以来続いていた興行が断たれた。私もリベンジを果たせぬままに執筆の役が終わった。

コロナ禍は、文音やリモート連句を盛んにし、今までにないメリットを生んだ。しかし同じ空気を共有しながら巻く連句の楽しさこそ醍醐味なのだということに気づかされてもいる。ある社会学者は、リモートによって文化は確実に低下するだろうと予想した。

熱気あふれる座の文芸を、正式俳諧を、また心から楽しめる日の近いことを願ってやまない。

第百五十三回例会　令和二年
猫蓑会総会作品　歌仙　1～2

走馬灯の座

歌仙「九十九里や」　吉田酔山　捌

九十九里や寂しき浜の土用波　酔山
　マスクメロンが棚にひつそり　秀樹
表彰状鴨居に高く掲ぐらん　敦子
　走り回れば叱られる子等　有子
名月のありてこそとや旧市街　樹
　紅葉狩りには揃ふご近所　山
箱買ひの新酒をどんと積み込んで　有
　人間ドック結果気にせず　敦
色つぽい女スパイのマシンガン　山
　似たる母娘は恋が生き甲斐　樹
行くだけの米国留学夢と消え　敦
　ナショナルフラッグ凍月へ飛ぶ　有
元力士いつもの稽古白き息　樹
　お布施つぎ込む競馬競輪　山
あこがれは石部金吉金兜　有
　塀の鴉がカアと鳴きたり　山
花の山御座候と能舞台　敦
　お伊勢参りに並ぶ三代　樹
大皿の眼張の煮つけ宿自慢　敦
　村中総出祝事なり　有
鉄道は右岸左岸と川渡る　樹
　カメラはニコン・キャノン・ミノルタ　山
あす本番サマードレスでランウェイを　有
いつの間にやらちよつとお昼寝　敦
ご主人を待ちくたびれた犬の顔　山
　訳があつても訳のないふり　樹
好きだから君の吃逆いいリズム　敦
　指揮棒を見て鳴らすシンバル　有
地球から付かず離れず月回る　樹
　斧を振りつつ睨む蟷螂　山
不惑過ぎねぶたの跳人志願して　有
　歯にべたべたとヌガーキャラメル　敦
このところ大学教授暇となり　樹
　暗証番号忘れたる叔母　敦
お目見えの電気自動車花吹雪　山
　風やはらかに流れゆく坂　有

連衆　青木秀樹　武井敦子　佐々木有子

水鉄砲の座

歌仙「緑陰に」　高塚　霞　捌

緑陰に何を想ふや翁像　霞
　たつた一声だけの初蝉　吉文
構へては坩堝の硝子吹くならん　孝子
　きりり鉢巻豆絞りにて　魚彦
月光の窓ごとに映え大団地　通斉
　馴染みの店にすする新蕎麦　斉
爽やかな川岸に聞くハーモニカ　吉
　戦の傷は今も消えざる　孝
整体師女を口説く腕もよく　斉
　瞋恚の炎背ナに明王　彦
をんをんと鐘鳴り渡る東山　孝
　撮影クルー底冷を押し　吉
照準を合はす月下の狐穴　孝
　太極拳に大地蹴る形　斉
関数の点をつなげば放物線　吉
　天使は窓に頬杖をつき　孝
憂ひつつをれば落花のしきるらし　彦
　雨の匂よ土の匂よ　霞
遍路笠お大師さんに導かれ　孝
　巣立ちの鳥の鳴き交す声　吉
少年の面差し残す勝者にて　仝
　スパコン富岳超ゆる脳味噌　孝
松籟も馳走に加へ納涼舟　斉
　粋な法被に惚れるお祭　孝
恋しくば飛び込んで来よこの胸に　仝
　シャワーの音の途切れ深閑　霞
角ごとの芥を攫ひ収集車　彦
　一軒毀ち二軒建つ土地　斉
立礼といふ作法にて月の茶事　吉
　鮎落つる頃故郷偲ばゆ　孝
腰痛を忘れて主役村芝居　彦
　蛇の目の猪口に新酒注がん　孝
「ぐりとぐら」眠い双子に読み聞かせ　彦
　びつくり箱を飛び出した夢　孝
花筐抱へハイカラさんが行く　霞
　暮れかねてゐる学舎の空　斉

連衆　永田吉文　坂本孝子　御園魚彦
　菅原通斉

第百五十三回例会　令和二年
猫蓑会総会作品　歌仙　3～5

水中花の座

歌仙「けふの雨」　江津ひろみ　捌

凌霄花の零す朱色やけふの雨　ひろみ
道行く人に増える白服　雅子
エスプレッソ長い蘊蓄聞かされて　忠史
卓上の本開いたるまま　あき子
見て見てと孫の指さす望の月　文伸
運動会で狙ふ一等　み
ウ ほかほかのままお隣へ茸飯　雅
実は仲良いおかめひよつとこ　史
カレンダーハートマークが並んでる　あ
国家試験に追ひ込みをかけ　伸
賽銭はいつもちやりんと硬貨のみ　み
寒の鴉がカアとひと声　雅
月冴えて揺るる提灯舟の宿　史
野菜嫌ひが青汁を飲む　あ
市長選無名新人勝利して　伸
安売りちらし配る街角　み
散る花へすれ違ひつつ軽く礼　雅
期待膨らむお蚕の出来　史
ナオ 牛の仔の耳のタグにも風光る　あ
北へ辿れば岩塊の山　伸
ばあちやんは軽く動画を投稿し　み
南無阿弥陀仏朝のお勤め　雅
切れ長の武者人形に彼思ふ　史
涼み浄瑠璃恋の道行　あ
憧るるエーゲ文明クレタ島　伸
売れぬ作家のバイトレジ打ち　み
つらつらと人生訓が酒肆の壁　雅
縦横無尽孫悟空飛ぶ　史
仰ぎ見るのこぎり屋根の月の影　あ
団栗しまふ筆箱の隅　伸
ナウ 爽やかに息を合はせて四重奏　み
お国訛りは今も変はらず　雅
メジャーへの夢の始めはノミネート　史
サイクルロード時に坂あり　あ
建前に角樽届く花の頃　み
春の炬燵に過ごす夕暮　伸

連衆　武井雅子　根津忠史　岩崎あき子
若林文伸

浮人形の座

歌仙「破れかな」　箭内敏枝　捌

蜘蛛の巣の大物得たる破れかな　敏枝
雨滴転がり落つる白百合　了斎
普段着を老舗の女将端折りゐて　美智子
マラソン走者抜きつ抜かれつ　鑑
昼の月すでに傾きかけてをり　純子
秋色濃しと仰ぐ山の端　斎
ウ 古酒開ける集ひに何故か猫も来る　鑑
雌で若くて肌もなめらか　斎
気がつけば髯の男と五十年　智
弥陀の称名わが子守唄　枝
塩飴を舐めつつ急ぐ帰り道　鑑
家それぞれのものの匂へる　純
湖に涼しき月のほのと揺れ　智
夜振の舟を音立てず漕ぐ　斎
こそ泥も走る鼠に仰天し　鑑
億の価値かも壁の落書　純
花咲けばものみな花と思ひつつ　斎
紫都の霞を樹医が見下ろす　智
ナオ ありえないもの浮かび来る蜃気楼　鑑
恐竜の骨またも掘り出す　斎
キャッシュレス成れば銀行過去のもの　鑑
時計の砂のさらさらと落ち　純
寒さうな姫を抱へて駱駝の背　斎
略奪婚に北風吹く　枝
珈琲の熱きに舌を焼きながら　純
今更誰も聞けぬ裏側　仝
遺伝子を組み換へてゐる老博士　智
猿の能面納得の出来　枝
月光に鯉の昇る絵くつきりと　鑑
花野に隣る露天岩風呂　斎
ナウ 卵溶く厨の音に涼新た　智
地蔵にかける赤いまへだれ　枝
在宅に慣れると電車乗れないね　鑑
もともと要らぬものばかりなり　斎
きのふより今日輝かせ花の舞　枝
お伽草紙をうららかに読む　智

連衆　鈴木了斎　聖成美智子　荒木鑑
近藤純子

金魚玉の座

歌仙「南溟に」

宇田川肇　捌

南溟に龍の跳ねるや送り梅雨　肇
波音低く響く短夜　千惠子
格納庫機体の整備はじまりて　転石
スマホいぢりを部下に教はる　美奈子
浮かれ猫寄り道多い三丁目　千
詩を吟じつつ仰ぐ淡月　肇
門とざしこごみ肴の独り酒　奈
ガテン系にてやたら口ベタ　石
馬鹿野郎に娘が嫁ぐ時が来て　肇
青い下着をそっと身につけ　千
拳銃はベッドサイドの棚の中　石
レジェンド残し去つたゲイリー　奈
聖母像に額づく我を月照らす　千
鵙の高音に耳を奪はれ　肇
唄ひつつどんぐり拾ふ小学生　奈
防空壕の奥に人形　肇
雪室で謎かけられる花言葉　石
霜焼の指赤くいとしい　千
乗るリズム細身の君が踏むラップ　石
煙草の煙円く輪を描く　奈
蚊柱の柱となりてまた崩れ　千
合従連衡秦国の計　肇
マスクでも本音のとこは隠せない　奈
ほら吹き男今日は神妙　石
果物の名前ばかりの豆名刺　肇
記憶力よくこなす二股　千
あの頃は人の指図に右左　石
いつも早めにウインカー出し　千
道草の月に揺れゐる穢土浄土　奈
村の古老と交はすどぶろく　肇
地芝居に用もないのに義経が　奈
忘れものです届く弁当　石
交番で字の間違ひも指導して　千
湯屋へ抱へるケロリンの桶　石
てりむくり銅葺屋根に飛花落花　肇
静かなる日に鳥巣立ちゆく　奈

連衆　鈴木千惠子　林　転石　鈴木美奈子

令和二年七月三十日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

●3、4ページからの続き

令和元年～二年度　正式俳諧配役

宗　匠　一紅庵良子
脇宗匠　林　転石
副宗匠　鈴木千惠子
執　筆　大島　洋子
知　司　根津　忠史
副知司　佐藤　徹心
座　見　武井　敦子

令和元年十月二十四日、芭蕉忌・明雅忌正式俳諧興行を終えて。当日の都合で配役は一部変更しています

座　配　髙山　鄭和
花　司　永田　吉文
香　元　平林　香織
配　硯　奥野美友紀
老　長　竹中　塁
（奏楽係）　青木　秀樹
武井　雅子

第百四十六回例会　平成三十年

猫蓑会総会作品　歌仙　1～4

赤星の座

歌仙「ひと日また」　鈴木美奈子　捌

ひと日また生き凌げよと蝉時雨　美奈子
　夾竹桃の赤さいや増す　良子
工場は煙も出さず静まりて　秀樹
　試合の後の顔の清しき　純子
持寄りの地酒自慢に月昇る　通斉
　テトラポッドにひたと初潮　良
ウ ランダムに絵の具重ねて芸術祭　仝
　どさくさ紛れ恋のささやき　斉
丙午ですかと問ふは性差別　樹
　無断外泊父は頑固で　斉
だみ声の太田薫は上司なる　良
　ちよつと左翼に巴里の街角　純
毛衣の端綻びて路地住ひ　良
　冬月慕ひ遠吠えの犬　純
山風かうちの内儀さんおつかない　良
　里の訛がまだわかりかね　斉
マイナンバーカード取得の花の宵　良
　新草（にひくさ）踏んで急ぐ釈尊　樹
ナオ 雲雀啼く新しき靴冷やかされ　純
　上棟式の大工十人　良
六年去りはやぶさ2はりゆうぐうに　斉
　乙姫さまは迎へ来たかと　良
外遊が好き白服のご落胤　樹
汗の身ほとりつるり逃げられ　良
バーチャルのミクなら振られないぞ僕　奈
　安倍政権も長つ尻です　樹
幼子にせがまれ寿限無ひとくさり　斉
　やつぱ恐竜見に福井まで　純
海上の名月眺め右左　樹
　古稀の翁の好む松茸　良
ナウ ポリープを数個取りたる秋小寒　仝
　入歯挿歯をネット販売　斉
落語家の次の真打期待して　樹
　猫と一緒に座る座布団　良
大いなる弥陀の掌にある花の夢　奈
　誘ひ合せる午後ののどらか　純

連衆　本屋良子　青木秀樹　近藤純子
　菅原通斉

夕凪の座

歌仙「炎天や」　棚町未悠　捌

炎天や旅客機ゆると上昇す　未悠
　白球追つてだくだくの汗　正夫
カフェテリア人気メニューに列なして　雅子
　小銭募金にありがたう言ひ　冨子
おとなしく月に尾を振る犬を連れ　酔山
　風吹くままに揺るる穂薄　雅
ウ 直島のアート賑はふ芸術祭　冨
　ベンチのふたりいい仲のやう　山
拗ねてみて甘えてもみる男前　雅
百科事典の受け売りをする　冨
物置のがらくたの山崩れさう　夫
　奥の細道自転車の奴　仝
海岸線凍てつく月を仰ぎつつ　雅
　頬被（ほほかむり）して拾ふ空缶　山
土石流墓も神社も埋め尽くし　仝
　運転免許返納の人　夫
次々とお国自慢の花筵　仝
　唄に合はせて鯛網を引く　山
ナオ 五年かけ歩き遍路を結願し　冨
　無理をするなと諭す町医者　山
右側をエスカレーター駆けのぼる　雅
　時計の針のまるで進まず　山
いつまでも甘い氷菓の溶けぬやう　雅
　単衣の女の細い襟首　冨
姉妹嫁にしたのは器量良し　雅
　大めしを食ひ大酒を飲む　冨
兵馬俑士卒軍馬をまのあたり　雅
　人それぞれに顔は履歴書　冨
有明の月みて替る夜勤番　仝
　駅を降りればすだく虫の音　夫
ナウ 村芝居稽古重ねて幕の開き　山
　母校いよいよ廃校となる　夫
「種の起源」時を忘れて読みふけり　雅
　煎餅屋継ぐ孫の決心　冨
軽トラが花の雲立つ里山を　悠
　朝日とともに高き囀　夫

連衆　國司正夫　武井雅子　名古屋冨子
　吉田酔山

朝焼の座

歌仙「翡翠」　捌　西田一枝

翡翠は木陰にいつもひとりぬて　一枝
少々重いキャンプ用品　あや
理学部の公開講座満席に　暁巳
折れてばかりの鉛筆の芯　有子
電波塔昇れば月へ届くらん　路子
新聞配達朝露の中　美智子
ウ 力士らは足の親指手の小指　路
通ひ詰めてるチイママの店　巳
僕の恋性も齢も超越し　有
懺悔室にて神父おろおろ　巳
秋田犬あつといふ間に巨大化す　や
燗酒呷り三重の月　有
布団干す独身寮の屋上に　美
山手線に新しい駅　や
一巡の頼母子講の懇親会　巳
買つたコロッケ大皿に盛る　美
花の町異国の人も数多住む　や
もてなす心運ぶ春風　路
ナオ 農具市脇に仏壇置かれあり　や
写真の母はトロフィーを抱く　美
お出かけに短い眉を描き足して　仝
平行線をきつちりと引き　有
寸分も違はず入る冷蔵庫　仝

平成三十年七月二十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

水着で魅せて貰ふマンション　巳
さあゆくぞ自家用ジェットで香格里拉　や
夢が覚めても止まぬときめき　路
ぱたぱたと立体絵本閉ぢられて　枝
関西弁の安いＡＩ　や
月佳しと北から歩む御堂筋　巳
ほのと草の香身を包み来る　路
ナウ 秋出水引きも切らずにボランティア　や
シニア劇団やつとキャストに　有
登り詰め見える景色は想定外　仝
偽の宝石指にでかでか　美
楚楚として鄙の花には鄙の品　枝
紙鳶追ふ子らの歓声　巳

連衆　中林あや　島村暁巳　佐々木有子
倉本路子　聖成美智子

朝凪の座

歌仙「合歓の花」　捌　高山鄭和

衿拭ふしぐさつましや合歓の花　鄭和
旅の一座に蝉時雨降る　孝子
とりあへず片道切符懐に　転石
ゆつくり削る鉛筆の芯　敦子
目力の案山子の仰ぐ月細し　あき子
渋取り作業終へる島長　和
ウ 本年は金毘羅祭世話役に　石
仕出し弁当彩りの佳く　あ
コラーゲンＡＴＰもたつぷりと　石

好きか嫌ひか体臭で決め　孝
ひえびえと詩の行間にある殺意　仝
王にならむと誓ふ冬月　石
摩天楼頂は雲突き抜ける　孝
クレームついて閉づるブティック　仝
評判の豆腐作りは豆に凝り　あ
持ち心地良きちぢみ風呂敷　敦
小面の花に萎るるたなごころ　孝
春の河原で遊ぶ兄妹　敦
ナオ ひばり鳴くサナトリウムの野の果てに　孝
三往復の路線バスあり　敦
家刀自に読みを尋ぬる難漢字　仝
みづから名告る宮様の裔　孝
新宿ぢやけつこうもてるホストです　石
愛の泉は永久に滾々　孝
磨かれて玉の輿なる妻の座に　敦
隣の芝生いつも気にする　あ
古蚊帳へ我先に入る四畳半　仝
うちの息子を医学部へ是非　石
稜線に懸れる月の耿として　敦
シャトーは早も葡萄醸せる　孝
ナウ 板さんは鱸の洗ひ鮮やかに　和
膝にちやつかり家出した猫　あ
詐欺電話美味い話に甘い罠　敦
おあとよろしく真打のオチ　孝
散りしきる花は醍醐の庭を埋め　和
暦通りに霜除けを解く　石

連衆　坂本孝子　林　転石　武井敦子
岩崎あき子

夕焼の座

歌仙「青東風」　平林香織　捌

青東風や大川縁のゆるき坂　香織
　芭蕉の花の揺るる黄緑　了斎
土器作り仕上に縄を転がして　肇
　見学の子ら右へ左へ　霞
宵の月口笛響く彼方から　俊子
　秋澄む頃は眠りよき頃　斎
ウ 先輩の面影探す美術展　肇
　カフェの出会ひが忘れられない　霞
人違ひされていきなり告られる　斎
　俺は無罪と叫ぶ獄中　肇
赤い薔薇百万本を敷きつめて　霞
　プチトリアノン窓に夏月　肇
脚上げておスベリすべる小公女　俊
　苛めになんか決して負けない　斎
師の声に扇を落とす寒稽古　俊
　裏か表かひらひらとする　斎
初花の産土様に人の列　霞
　新入社員名刺差し出す　俊
ナオ 串ざしの若鮎焼いてハイボール　仝
　チバニアン層見える渓谷　肇
恐竜と陰口言はれのさばつて　斎
　総理の椅子は儂の一存　肇
伸縮しリクライニングする仕掛け　斎
　超絶技がやつと完成　霞
婿様は円周率を諳んじて　肇
　字引調べるやうにまさぐる　俊
空つぽのままねどなたに抱かれても　斎
　資産寄付して落飾の時　肇
塔頭のいよいよ高し月近し　斎
　夜といふのにかささぎの鳴く　仝
ナウ 香り来る散歩の路地の零余子飯　霞
　ママ友たちとつきぬおしやべり　俊
知つてゐる知りたくもなきことまでも　斎
　倉庫の隅に眠るお宝　肇
リサイクル着物の袖に花の舞ふ　織
　異国の人と集ひ野遊　肇

連衆　鈴木了斎　宇田川肇　高塚　霞
　三木俊子

雲海の座

歌仙「笑つちやふ」　由井　健　捌

笑つちやふ他にすべなき大暑かな　健
　布袋葵のぷかり水鉢　千恵子
リビングでカードマジック子供らに　吉文
　ブラックコーヒー味はひて飲む　佐紀子
雲間より月の昇るをしばし待つ　惠子
　秋の蛇にはちよつかいの猫　千
ウ 街頭の鬚のラッパー身に入みて　吉
　心のたけを託すCD　惠
ふと気付く愛が重荷になつてゐる　千
　セピア色なる母の想ひ出　佐
懐しき蒸気機関車復活す　惠
　東京五輪通訳をせん　吉
凍月にお国柄なるマスコット　仝
　アニメのキャラは少し着膨れ　千
読経する声ありがたき阿闍梨様　佐
　町内会で塵拾ひする　吉
花片のひらり舞ひくる天守閣　佐
　あらぬ方より突如囀　千
ナオ 磯海女は浮いて此岸の賑やかに　仝
　自在の鉤は煤で真黒　惠
お絵描きのクレヨン紙をはみだして　千
　冷えたジュースを一気飲みする　佐
出水には引く手数多の支援隊　吉
　国会答弁しどろもどろで　佐
親馬鹿は可愛さが過ぎ子を駄目に　惠
　昔秀才今は追つかけ　吉
プロポーズ酔つたふりでのサプライズ　千
　嘘の涙は恋の裏技　健
国芳の錦絵濡らす赤き月　千
　セーヌのカフェに灯火親しむ　吉
ナウ 丘に聞くチャペルの鐘のそぞろ寒　惠
　低気圧来て膝を気にする　千
鍵を掛け自転車止める駅の前　佐
　新聞配達休むことなし　吉
行く水に影を映して花万朶　健
　芝生の上で遊ぶ子雀　惠

連衆　鈴木千惠子　永田吉文　間佐紀子
　渡辺惠子

片陰の座

歌仙「老犬の」の巻　江津ひろみ　捌

老犬の息確かむる溽暑かな　ひろみ
夕暮を待ち夏果の道　淳子
おはじきに男の子らもはしやぎゐて　敏枝
大きな紙に丸や三角　泉子
藍色の宇宙拡がる月白に　文伸
雨戸開ければちちろかしまし　徹心
ウ
初恋の秘密基地へと一葉落つ　淳
嘘を教へた憎らしい人　心
甘辛も妻の好みで変へられて　仝
既製のスーツ着こなしてみる　泉
もがり笛電線鳴らしヒョウと過ぐ　淳
凍月中天甍皓皓　仝
突然に安全靴の刑事来る　泉
龍馬大好きもじやもじやの髪　伸
銭湯の噂話は牛乳で　枝
何でも切れるゾーリンゲンは　淳
花の下八木節の樽響かせて　枝
昭和の日々をなつかしむ春　伸
ナオ
古本の街さまよへば弥生尽く　心
カフェに入荷の酒すすめられ　淳
閻魔様けふは柔和な赤ら顔　心
男まさりの女子の野球部　伸
ジャズ喫茶店主自慢のコレクション　淳

平成三十年七月二十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

さりげなく置く鈴蘭の鉢　泉
鍵渡し軽き口づけまた逢はう　淳
約束凍ててやがて忘れる　泉
禅譲の期待どほりに進められ　枝
ナショナリストの増える世の中　伸
灯も消えて眠れる街に望の月　心
自転車の荷は秋刀魚一箱　仝
ナウ
地芝居の子役の母のそはそはと　淳
ペットボトルは小さめがいい　泉
周回路十周するを日課にて　伸
なくした定期届く事務室　心
棟上げの餅も撒かるる花吹雪　み
島民の夢託す初虹　枝

連衆　上月淳子　箭内敏枝　青木泉子
若林文伸　佐藤徹心

二条良基に学ぶ

『連理秘抄』より

連歌は心よりおこりて、みづから学ぶべし。さらに師匠の教ふるところにあらず。常に好みもてあそびて上手にまじるべし。如何にすれども堪能（上手）に交はらざればあがる事なし。不堪（下手糞）のものにのみ会合して稽古せんは、なかなか一向無沙汰なるにも劣るべし。初心のほど殊に用心すべき事なり。

（中略）初めより強き（荒々しい）連歌に練習しぬればやがて詞荒くなる。幽玄なるに習へば、生得に不堪なる人も風体を得るなり。初心の人殊に優しくおだやかに、具足（句材）すくなく、するするとしたる句を、思ふところなく口軽く付くべし。このほか、ゆめゆめ稽古に故実も口伝もあるべからず。

（中略）初心の程、あながちに思案すべからず。初一念といふが如く、思ひ寄るところをとかく案じ乱すことなくてやがて出すべし。（中略）連歌は猶上手になりて後も、善悪をひしと治定する事は難し。下品の句と思へども、点者の意巧によりて長点などあること常の事なり。これは点者の悪きにてもなし。我善悪をわきまへざるにもあらず。ただ時によりて心にそむ事のあるにや、堪能なほ此のごとし。いはんや未練の者善悪をわきまへがたし。所詮口軽くしなして心地を沈むべからず。

かく言へばとて、一向に付かぬ句をせよとにはあらず。ただ風情をよばず、詞も足らぬを、とせんかくせむと案ずれば、初めの案よりも猶あしく案じなす事あるなり。か様にて人にふと越されて、ちぢけたちぬれば（萎縮すれば）あがる（上達する）事なし。またものぐさくなる因縁（原因）なり。言葉あくまで優しく、寄合（前句の語との縁語）少く、するするとすべし。

（中略）詞の足らぬが故に景物にて飾り立てんと奔波する程に、あながちに好み付くることは見苦しく侍り。（中略）幽玄の景物を荒蕪の詞にてそそかす（毛羽立てる）事、もつともいたましき事なり。（13ページ『撃蒙抄』へ続く）

令和三年八月九日

第四回猫蓑会リモート Zoom 4

桐壺の座

二十韻「血を吐く喉の」　鈴木了斎　捌

かなかなに血を吐く喉のなかりけり　了斎
　軽やかに舞ふ踊り子の群　有子
月光を綾絹のごと纏ふらん　桃胡
　塩は何でも薄いのがいい　暁巳
ウ いつのまにトマトが赤くなつてきて　志保子
　好いた男へミサンガを編み　巳
大き目を見開いてゐる孤児の恋　胡
　うづくまりつつ己が膝抱く　斎
五十年同じ鞄を使ひをり　有
　ラッシュアワーの今日も変はらず　志
ナオ 宇宙ではハヤブサがイトカワへ飛ぶ　仝
　漫画雑誌の立読みが趣味　巳
着ぶくれの娘が蒸した中華饅　胡
　セーター脱がす間さへもどかし　斎
逢引は鎮守の杜の雪月夜　志
　何の鳥だか鳥の啼く声　有
ナウ 本棚に誰も開かぬ百科辞書　巳
　なんまいだぶですべて済ませる　斎
尼の住む低き庵に花の雨　巳
　種井（たねゐ）に水の満ちてくるころ　志

連衆　佐々木有子　裏谷桃胡　島村暁巳　北龍志保子（きたきみ）

帚木の座

二十韻「秋を漕ぐ」　鈴木千恵子　捌

自転車のサドルを上げて秋を漕ぐ　千恵子
　薄月浮かぶ萩潜る先　鄭和
初猟に気持ち高ぶる犬のゐて　あき子
　くつきり残る土間の足跡　仮名
ウ 婚礼の後片付けは皆をなご　和
　セクハラも駄目モラハラも駄目　千
先輩の電話番号消しかねて　名
　苦さこらへて飲む正露丸　あ
シロップは七色混じるかき氷　千
　赤門傍に葦簀茶屋あり　和
ナオ 遠見には潮風はらむ帆引舟　あ
　いたづらつ子のイルカはぐれる　名
ご贔屓の旦那酒断ち願を掛け　和
　線香一本燃え尽す恋　千
思ひ出す君と見あげし夏の月　名
　野外演奏ジャズとコーヒー　あ
ナウ Tシャツにオリジナルロゴ染め抜いて　千
　蝶の群がる山裾の道　和
ご無沙汰を詫びて筆とる花便り　あ
　眠気覚ましにしじみ汁吸ふ　名

連衆　髙山鄭和　岩崎あき子　佐藤仮名

空蝉の座

二十韻「涼新た」　佐藤徹心　捌

涼新た干したシーツの陽の匂ひ　徹心
　月の光が包み込む夢　をんみ
舷窓に高潮の波打ちよせて　転石
　地域猫来て魚むしやむしや　未悠
ウ 席替のたびにあの子に近くなる　香織
　やぼな世間に道行の真似　蝸舎
脇見して信号無視の青切符　を
　山小屋はまだ先の尾根筋　石
焼跡に帰化植物が繁茂する　織
　進駐軍はパイプ吹かして　石
ナオ 聖歌隊ボーイソプラノのびやかに　織
　詩人とつつくけとばしの鍋　舎
青森の楽しみ雪と月と酒　悠
　母親譲り舌を出すのも　織
寺参りめざす美形のあの尼僧　悠
　魔物も逃げる恋の煩悩　を
ナウ トランプの一人ゲームを繰り返す　織
　サラダ菜食べるテーブルの白　舎
機関車は隧道抜けて花の中　悠
　鰊曇りの北国の空　石

連衆　福澤をんみ　林　転石　棚町未悠　平林香織　岩田蝸舎

夕顔の座

二十韻「五輪果つ」　近藤純子　捌

五輪果つ悲喜こもごもに荻の風　健
安堵の頬を照らす月光　良子
唐黍を箱いつぱいに送られて　聰
枠をはみ出し笑まふ幼な児　一枝
ウ 高々とドローンの飛び彼方へと　功
病院混乱頼むウーバー　純子
惚れすぎて時を盗みて接吻す　功
夫婦茶碗の欠の金継　枝
キンと鳴る不協和音も産みの種　功
手元狂つて消えた跳炭　健
ナオ 白鳥の舞を飽かずに眺めをり　良
荒れのやまないオホーツク海　仝
いつしかに神居古潭は人気なく　聰
めまとひ払ふ工房の窓　枝
月の下「死神」咄す夏の寄席　功
阿保やなーとは好きといふこと　良
ナウ 騙された振りを通して半世紀　聰
葷酒山門入れば囀　健
奏楽の獅子花の宴彩りて　純
思ひのままに揺らす鞦韆　聰

連衆　由井　健　本屋良子　杉本　聰
西田一枝　松本　功

若紫の座

歌仙「那須の宿」　功刀太郎　捌

蜩の鳴きつくしてや那須の宿　酔山
かの怪石に秋の初風　濤声
会社退けビルの隙間に月出て　円水
缶コーヒーでほつとひと息　敦子
船員の客が港の散髪屋　太郎
帰省子嬉し生家への道　山
ウ 夏料理地元野菜のふんだんに　声
ＹｏｕＴｕｂｅ見て習ふフレンチ　水
所在なくカード占ひ独りして　敦
いつも頭にあの人は今　太
涙して酒飲む女気にかかり　山
トランペットのジャズのクールさ　声
爺さまの火の用心の声遠く　水
年越祓大杉の月　敦
虫食ひの延喜式なる稀覯本　太
母校野球部やつと一勝　山
先輩は苦労したれど花の宴　声
土手の散歩に初雲雀揚ぐ　水
ナオ 春コート諸事片付きて身も軽く　敦
曽良の日記の齟齬が解けたり　太
今すぐに入院せよと担当医　山
勧誘しきり投資信託　声
口裂けがお化け屋敷の呼込に　水
隣家の婦人整形の夏　敦
君の手をとり持ち上げて岩登り　太
出張帰り夫懐かし　山
うかうかと秘密結社にかかはつて　声
人形供養いつも受け付け　水
眉月の軒に懸りて針仕事　太
蔦紅葉佳き丘の教会　敦
ナウ 落鮎を狙ひ仲間と竿みがく　山
自慢話はほどほどにせよ　声
アイドルはアヒルの口を得意芸　水
アクション映画山場迎へて　敦
花守のこころ打たるる仕事ぶり　山
ひねもす遊ぶ摘草の原　太

連衆　吉田酔山　小原濤声　植田円水
武井敦子

二条良基に学ぶ　『撃蒙抄』より

（11ページより続く）

当世、倒語句常にこのむ人あり。上の句詞（前句）にかけあひてよく言ひおほせつれば、ひとつの姿なりといへども、連歌損ずる因縁（原因）なり。尋常に（やたらに）用るべからず。秋の夕暮をゆふぐれの秋といひ、曙の花を花のあけぼのといひ、花の嵐を嵐の花と云ふ様の事なり。詩句（漢詩）もこの体ありといへども、庶幾（しよき）（模倣）せざるよし、先達申すなり。ただし俊成卿露の夕暮といひ、定家卿雪の夕暮と詠ずる、その傍例なきには非ず。（以上）

令和三年六月十二日

第三回猫蓑会リモート Zoom 3

昔男の座

二十韻「ひとかたまりの」　鈴木了斎　捌

あぢさゐのひとかたまりのちからかな　了斎
　でで虫みつけはしやぐ幼子　三世子
瞬けば飛行機雲は輪になつて　聰
　ほつと息つきほうじ茶を飲む　美智子
ウ　オーボエを誰か吹いてる夜半の秋　未悠
　スーパームーン欠けはじむらし　世
葉月にはふたりの未来信じてた　斎
　告白の文姉が代筆　智
藁屋根のぽつんと残る山の裾　悠
　ころりおむすび転がつたまま　世
ナオ　キッチンカー始めてみたら大受けし　悠
　老いたれどなほ尽きぬアイデア　聰
いつのまに叙勲の沙汰の見え隠れ　仝
　地味な小袖の座る炉開　悠
咳き込んだ背なを撫でやる月の径　聰
　抱いてほしいが口に出さない　斎
ナウ　献立にワイン付くのはそのサイン　世
　なにはなくともきしやご常節　聰
宇宙へと花の山から汽車に乗り　悠
　高々揚がる文字太き凧　智

連衆　高月三世子　杉本聰　聖成美智子
　棚町未悠

しのぶ山の座

二十韻「緑陰」　功刀太郎　捌

自転車を降り緑陰の人となり　太郎
　時の記念日市役所の鐘　敦子
風呂敷は蝶々結びもてなしに　あき子
　晩ご飯には何を食はうか　健
ウ　顔立ちがエキゾチックなお月さま　敦
　いとも稚拙な捨て扇の絵　太
携帯の相合傘も爽やかな　健
　離れの襖絡めあふ指　あ
郷愁は国際便のアナウンス　太
　ショパンの街に石畳踏む　敦
ナオ　聳え立つ十字の塔に空つ風　あ
　御高祖頭巾へ燦々と月　健
精いつぱい愛することは難しい　敦
　秘めてこそなる恋の喜び　太
真実は小説よりも奇だと言ふ　健
　能の奥義は一子相伝　あ
ナウ　荒行へ向かふ背中に鑽火切り　太
　春泥跳ねて駆ける野球部　敦
逆しまに蜜吸ふ鳥の花万朶　あ
　盃に浮かぶは霞む峰々　暁巳

連衆　武井敦子　岩崎あき子　由井健
　島村暁巳

沖つ白浪の座

二十韻「リモート連句」　林転石　捌

七変化飾るリモート連句かな　良子
　入梅を待つ庭の静けさ　鄭和
谷戸にまで潮騒の音聞こえきて　酔山
　頬をなでゆく柔らかな風　円水
ウ　満月の光を浴びる修行僧　良
　菊人形は君によく似る　仝
秋乾キスは私の全身に　和
　煮汁甘めに炊いた厚揚　水
運悪く選挙違反が公に　山
　たっぷり肥えて熊穴に入る　水
ナオ　炭俵担ぐ親爺の確かな歩　和
　演歌のこぶし利かせボサノバ　山
あの人と列車で向かふ幸の国　水
　席同じうして恋の始まり　仝
語りつぐ月の奇譚を夏の夜半　山
　島の岬に蝙蝠は飛び　良
ナウ　水脈を引く定期航路のカーフェリー　和
　眺めもよしと酒をなみなみ　山
黒帯を締めて出でたつ花の道　転石
　ドラマの続き追うて惜春　執筆

連衆　本屋良子　髙山鄭和　吉田酔山
　植田円水

武蔵野の座

二十韻「蝸牛」　近藤純子　捌

蝸牛雨をほしげに背伸びして　里美
立葵咲く丸き西窓　徹心
入念に小さきフィギュアを磨くらん　千惠子
塩豆大福すぐになくなる　一枝
ウ 月のぼり真葛が原に思ひ馳せ　蝸舎
夫婦星逢ふぬばたまの夜　純子
わが恋は猪のごとくに突進し　千
きれいさつぱり返す借金　枝
餌撒けばぱつと飛びつく鯉の群れ　舎
しはがれ声で選挙応援　心
ナオ 寒行の山の行者の透きとほる　千
中央高速冴え冴えと月　枝
ミッキーの枕抱へて助手席に　心
オンリーユーと照れて告白　良輔
河岸に寄り添ふ影が並ぶ町　心
お持ち帰りの清酒一本　輔
ナウ 風呂敷をアートの世界に取り込んで　千
草間彌生はいまも奔放　枝
青空を水面に映し花筏　輔
ふらここ揺るる午後のひととき　枝
連衆　井上里美　佐藤徹心　鈴木千惠子
西田一枝　岩田蝸舎　北村良輔

令和三年四月十一日

第二回猫蓑会リモート Zoom 2

1～2

東下りの座

二十韻「たましひの」　鈴木了斎　捌

たましひの白蝶ほのとまつはりぬ　了斎
指笛を吹く惜春の野辺　葵
夏近き中華街まで繰り出して　濤声
繕ひあとの刺繍可愛く　あき子
ウ 千社札貼るなと貼られ月涼し　あ
あと一話なりアラビアの夜　葵
唐突に女房からのメール来る　仝
尾行調査で溜まる吸殻　あ
裏路地の閉店したるJAZZ喫茶　声
文庫のニーチェ置き去りにされ　仝
ナオ 諾としか答へ許さぬ独裁者　葵
鍋底さらふ卵雑炊　あ
駆落ちの末に長屋へ流れ着き　声
紅き唇映ゆる手鏡　あ
満月を呑んでをんなは母となる　葵
土器の壺中に秋色の充ち　斎
ナウ 跳ねまはる角切終えたあとの鹿　あ
賑々しくも唄と太鼓を　仝
海へ向く丘を登りて花見酒　声
砂浜に寄る波ののどらか　執筆
連衆　石川葵　小原濤声　岩崎あき子

都鳥の座

二十韻「春蝉や」　島村暁巳　捌

春蝉や七堂伽藍黙しをり　暁巳
藤の棚まで届く声明　酔山
姉弟紙風船で遊ぶらん　香織
ホットケーキを焼けばふつふつ　円水
ウ 月めぐる軌道の線もきはやかに　三世子
障子を洗ふ新妻の背　織
君と訪ふ辰雄の旧居吾亦紅　世
別れの曲を今日も練習　仝
千切りの山拵へて夕餉時　円
熊の刺身は舌で溶かして　仝
ナオ ボヤかよと消防隊員ぼやきをり　山
SNSがまたも炎上　織
誰も彼も綱つけられているやうな　世
星を降らせて山小屋の月　織
肌脱の三頭筋に爪を立て　仝
見ぬふりをして猫が妬いてる　世
ナウ 若き弟子師匠追ひ越し恩返し　山
琥珀の古酒を皆で呷りて　円
望遠で狙ひ定めた花万朶　山
ゆつくり過ぎる耕牛の影　織
連衆　吉田酔山　平林香織　植田円水
高月三世子

令和三年四月十一日

第二回猫蓑会リモート Zoom 2

3

八つ橋の座

二十韻「初つばめ」　近藤純子　捌

初つばめ瑠璃色の空忘れ得ず　純子
　雪解の川の高き水音　太郎
目刺売る公設市の店先に　健
　買物袋いつも持ち行く　敦子
ウ　帰るさの派手なアロハに上る月　太
　泡越しに見る素足つややか　純
次々の浮気は芸の肥しです　敦
　裏梯子から消える魔術師　健
リモートで副業三つ掛け持ちす　純
　あはれ狸の末路知られず　太
ナオ　山門に葷酒入らずもあぐら鍋　健
　ＵＦＯ見たとまたもつぶやく　敦
かまつかのやうに操が揺れてゐる　太
　ふたりで戯れた秋の蚊帳吊り　純
月翳り魑魅魍魎の跋扈して　敦
　似顔絵画家がひさぐポンチ絵　健
ナウ　部下の出すアイデアいつも群を抜き　純
　病が癒えてめざす遠乗り　太
千年越え人楽します花大樹　健
　ゆつくり列の動くのどけさ　敦

連衆　功刀太郎　由井　健　武井敦子

第三十五回国民文化祭みやざき二〇二〇 連句部門受賞作品　三巻

宮崎県教育委員会教育長賞

歌仙「海人の裔」　石川　葵　捌

海人の裔の入東風待ちにけり　石川　葵
　九年母生へる島の石垣　坂本孝子
家々の機織る音の軽やかに
　火を細めてはずらす鍋蓋
竹刀負ひ月の下なる豆剣士
　身を引き締めるやや寒の影
ウ　酒蔵の新酒じやの目の猪口に注ぎ
　諸国行脚で触れる人情
浮かれ女の番犬にまで慕はれて
　籠の鸚鵡がしやべる睦言
三半規管どつぷり浸る愛の淵
　避暑地の駅に惜しむ有明
含羞草将棋倒しのやうに閉ぢ
　黙秘を通す取調べ室
窓枠の隙間程度の自我持ちて
　北の浜辺に流れ着く船
国生みの神は大樹の花に寄り
　輪になつてをどる春の乙女ら
ナオ　朧夜のヴィオロン弾むモーツァルト　孝
　ブルーインクで手紙したため　葵
小為替は一山越えて現金に
　技術引き継ぐ眸真つ直ぐ
伊勢型紙江戸で染められ恋衣
　ふたりを包む今生の雪
コンコース肩を抱けば夫婦めき
　芸能情報自販機で売る
悠久の地上絵の鳥羽搏かず
　代々守る王の御陵
三日月に捧げる夢はただ平和
　運動会の僕はヒーロー
ナウ　胸いつぱい爽涼の気を吸ひ込みて
　とろろ飯売る茶屋の縁台
食前の薬を母はまた忘れ
　猫と暮らせばけふも楽しく
花明かりふらんす窓の文学館
　イースターエッグ眠る叢　執筆

平成三十年十一月十六日起首
同十二月二十一日満尾　於　文音

日南市議会議長賞

歌仙「紅兆す」　西田荷夕　捌

薔薇の芽に紅兆す垣根かな　西田荷夕
　近づいて来る春のトレモロ　服部秋扇
山笑ふ駿馬の睫毛長くして　山口輝久
　踵ぴしりと編み上げの靴　夕
蹲踞の表面張力月あふれ　扇
　鰯へしこで小半（こなから）の酒　久
ウ　海猫帰る演歌の沁みる侘び住まひ　夕
　師匠真似して粋な角帯　扇
カルピスはすつぱさが好き甘さより　久

ナナハン並べ疾駆する街　夕
背を反らせ抱かれてにくき彼の腕　扇
カフスボタンは何処へ消えたの　久
夏の風邪消毒液を携帯し　夕
月光仮面は白いマスクで　久
しんがりは桂男の懐手　扇
江戸の運河は猪牙舟で行く　夕
ゆるやかに寄りつ離れつ花筏　久
裾野の畑を小さきトラクタ　扇
ナオをさなごの眠る窓辺をはだれ雪　久
詩人の墓に雉鳩の来る　夕
合唱の清らかに滝廉太郎　扇
無観客のホールこだます　久
国捨てて渡る大陸影寒く　夕
ビーツ煮込んで母のボルシチ　扇
不意に声掛けられさうな三つの道　久
貧しき姫に面影を見て　夕
こころ解くやうにわたしは紐を解き　扇
慰問袋に薄く残り香　久
月の色うつして銘菓黄身しぐれ　夕
椋の実零る糺の森を　久
ナウ文化の日勲章授与の知らせ来て　夕
オレオレ詐欺の声は優しい　久
思ひ出の棟割長屋子沢山　夕
グーからパーにたなごころあく　久
花万朶人こぼさぬやうに地球号　夕
湾曲をする干潟広きよ　執筆

令和二年三月三日起首
同三月三十日満尾　於　文音

ジュニアの部・宮崎県連句協会奨励賞

表合せ六句「ドレミファソ」　平林香織　捌

ドレミファソ月にむかってラッパ吹く　麟太郎
パート練習秋の教室　鉄太郎
昼御飯育てたかぼちゃ料理する　鉄
風呂も床屋も大人料金　麟
駒ヶ根の森の向こうの遠花火　麟
前歯ぽろりと夏の思い出　鉄

連衆　村上麟太郎　村上鉄太郎
令和二年九月二十六日　首尾
於　東京・長野リモート連句

連句に出会ってくれてありがとう

平林香織

本誌百十三号に、長野市で双子の連句兄弟が活躍している記事が掲載されたことをご記憶の方もいらっしゃるだろう。善光寺門前連句会・竹中禎子さんがお書きになったものだ。村上麟太郎・鉄太郎兄弟のことである。彼らが巻いた表合せ「ドレミファソ」の巻が、第三十五回国民文化祭・みやざき二〇二〇のジュニア部門で、宮崎県連句協会奨励賞に輝いた。

連句をはじめたとき、小学校四年生だった彼らは、今では中学二年生。奇数月に開催している門前連句会は、コロナ禍のなかでいち早くリモート開催をするようになり、二年が経過した。自他ともに認める連句少年である麟鉄兄弟も、都合がつく限り参加してくれている。中学生になった彼らが、二〇二〇年九月のリモート連句会で巻いたのが「ドレミファソ」の巻だ。

画面越しに会うたびに、声変わりしたり背が伸びたり、彼らの成長ぶりは著しい。連句をはじめたときから、豊かな発想と巧みなことばづかいで、大人顔負けの付句をどんどん出す二人だった。五年が経過した今では、家族思いのやさしさ、食いしん坊ぶりや茶目っ気があふれることばを並べた付けが、一座を盛り上げる。

「ドレミファソ」の巻は、麟鉄兄弟の生命力満載の一巻だと思う。吹奏楽部に入ったけれど、コロナ禍で満足に合奏練習ができない。しかし、彼らはあしたにむかってラッパを吹く。育てたかぼちゃはぐんぐん大きくなる。もりもり食べて、身長は一七〇センチを越えた。コロナ禍で旅行に行ったり親戚が集まったりはできなかったけれど、家族でキャンプに行き楽しく夏を過ごした。

麟鉄兄弟には咲耶ちゃんという年の離れた妹がいる。お兄ちゃん二人が大好きで、麟鉄兄弟もとてもかわいがっている。リアルの会でもリモートでも彼女の存在が、連句会をいっそう華やかに彩る。挙句は咲耶ちゃんのことである。

麟鉄よ、連句に出会ってくれてありがとう。

第三十五回国民文化祭みやざき二〇二〇
連句部門受賞作品

第二十五回（令和三年）
えひめ俳句全国連句大会入賞歌仙三巻

松山市文化協会長賞

歌仙「猫車」　鈴木千惠子　捌

猫車休む木陰に秋の風　千惠子
　昼月仰ぎ叩く溢蚊　雅子
酒林新酒の出来を利くならん　孝子
　七種の色で分けた地形図　肇
ミステリーツアーのバスはひた走る　忠史
　むぎわら帽子忘れたの誰　通斉
ウ聖歌隊薔薇窓の影涼しげに　孝
　バナナの皮を置いていたづら　肇
許さないたつた一度と言ふけれど　孝
　閻魔大王朱き舌先　斉
君となら幾山河も厭はない　史
　深雪の閨に温め合ふなり　孝
崩れゆく城の虎口に冴ゆる月　肇
　防犯カメラこんな所に　雅
かつ丼が届く頃だと期待して　史
　百米走十秒を切れ　雅
墨水を薄くれなゐに花の雨　斉
　巣立の鳥をそつと見守る　史
ナオ遍路笠閏の年は逆廻り　仝
　サヌカイトにて作るマリンバ　肇
南海の貝を集めてプロポーズ　仝
　夢はかなくも眠る姫君　孝
山盛の氷いちごのとけてゆき　雅
竹下通り人はぞろぞろ　孝
スカウトは勘をたよりに声かけて　雅
　雑種犬です俺の相方　孝
七年間官房長官務めあげ　史
　故郷の訛いまだ抜けざる　斉
月今宵提灯ゆれる馴染み宿　史
　夜業のために眼鏡買ひ替へ　肇
ナウうそ寒の嗽消毒念を入れ　孝
　鷗外太宰墓処を同じく　仝
勲章も肩書もなし老人会　斉
　通販サイトすぐにクリック　雅
花の下ダブルダッチを駆け抜ける　千
　長閑に暮れる学舎の庭　斉

連衆　武井雅子　坂本孝子　宇田川肇
　根津忠史　菅原通斉
令和二年十月五日　首尾　於　江東区芭蕉記念館

俳句賞

歌仙「緑陰に」　高塚　霞　捌

緑陰に何を想ふや翁像　霞
　たつた一声だけの初蝉　吉文
構へては坩堝の硝子吹くならん　孝子
　きりり鉢巻豆絞りにて　魚彦
月光の窓ごとに映え大団地　通斉
　馴染みの店にすする新蕎麦　斉
ウ爽やかな川岸に聞くハーモニカ　吉
　戦の傷は今も消えざる　孝
整体師女を口説く腕もよく　斉
瞋恚（しんい）の炎（ほむら）背ナに明王　彦
をんをんと鐘鳴り渡る東山　孝
　撮影クルー底冷を押し　吉
照準を合はす月下の狐穴　孝
　太極拳に大地蹴る形　斉
関数の点をつなげば放物線　吉
　天使は窓に頬杖をつき　孝
憂ひつつをれば落花のしきるらし　彦
　雨の匂よ土の匂よ　霞
ナオ遍路笠お大師さんに導かれ　孝
　巣立ちの鳥の鳴き交す声　吉
少年の面差し残す勝者にて　仝
　スパコン富岳超ゆる脳味噌　孝
松籟も馳走に加へ納涼舟　斉
　粋な法被に惚れるお祭　孝
恋しくば飛び込んで来よこの胸に　仝
　シャワーの音の途切れ深閑　霞
角ごとの芥を攫ひ収集車　彦
　一軒毀ち二軒建つ土地　斉
立礼といふ作法にて月の茶事　吉
　鮎落つる頃故郷偲ばゆ　孝
ナウ腰痛を忘れて主役村芝居　彦
　蛇の目の猪口に新酒注がん　孝
「ぐりとぐら」眠い双子に読み聞かせ　彦
　びつくり箱を飛び出した夢　孝
花筐抱へハイカラさんが行く　霞
　暮れかねてゐる学舎の空　斉

連衆　永田吉文　坂本孝子　御園魚彦　菅原通斉
令和二年七月三十日首尾　於　江東区芭蕉記念館

俳口賞

歌仙「天平の鴟尾」

橋本枯野　捌

爽籟や天平の鴟尾隠れなし　ひろ子
黄金色なす端正の月　枯野
炊き立ての松茸飯の香るらん　君枝
ふるさと納税迷ふ寄付先　子
声援にクリーンヒット草野球　野
杓の清水で喉を潤す　枝
ウ
青胡桃いのちの密度濃きかたち　子
君を取り巻く光やはらか　野
眼裏に舞妓のうなじ塗残し　枝
埋蔵金を掘りに犬旅　子
船積みのシガーとスパイス噎せ返り　野
手帳ひらひら警部現る　枝
雪月夜汚れなき日の懐かしく　子
暖炉の炎トナカイの角　野
ちんぷんかんぷん現代アート展　枝
行列あれば並びたくなり　野
花の窓体重測る小学生　枝
明日葉摘みて菜の一品　子
ナオ
春潮の寄する岬に熱気球　野
鳴らすシンバル曲は佳境に　子
コイン置く大道芸のシャンゼリゼ　枝
外出制限灯の消えた街　野
密会は男の胸でちよつと泣き　子
母宛ぢやない父の恋文　枝
真つさらの鋏もて剪る白牡丹　野
光琳絵皿メルカリで買ふ　子
役僧の好きな渋茶と甘納豆　枝
スクーターなら軒にひつそり　野
三日月と相性のいい猫が来て　枝
案山子の里でおどろくは人　子
ナウ
寄り合へば笑ひ茸でも食つたかに　野
上下を振る真打の芸　子
裏通り昭和レトロな屋台酒　枝
心ひとつの帰雁うつくし　野
曙の空の欠片か花の降る　子
ふらここ揺らすまどろみの夢　枝

連衆　白崎ひろ子　梅田君枝
令和二年九月二十六日起首　同十月二十七日満尾
於　文音

武生連句の会の三人組として

橋本枯野

私たちが文音で三吟を始めたのは平成二十六年十二月のことです。この年の六月に武生連句の会を指導してくださいました二村文人先生が急逝されました。

福井県の国民文化祭を機に開催前の勉強会から始まったという武生連句の会はこのとき発足から十年余。会員の中でも新参であった私たちは僅か三、四年の経験で連句の師を失うことになりました。途方に暮れつつも、とにかく実作を重ねたい、いつも頭の中を連句モードにしておきたいと気心の知れてきた新参組の三人で始めたメール文音でした。

武生連句の会はそれから間もなく、三木蓮糸代表の発案で青木秀樹先生に当座の添削指導をお願いしました。毎回、作品ごとに頭の下がるくらい丁重かつ大量の添削文を返していただいたものです。さらに水上潤子氏がメール文音で指導をお願いできる方々に絶えず働きかけてくれました。鈴木千恵子氏はそうして今も懇切丁寧に指導してくださるお一人です。

この間の約七年、私たちは月例の句会と誘っていただく限りの文音に参加してきました。その合間に私たちの三吟に戻ってくる。こちらの三吟ならば気楽だからと甚だ緊張感を欠いて起首するのも、私たちが幾らかは呼吸を合わせやすくなってきたからかと思います。

しかし巻を重ねるよりもっと早いスピードで年齢が重なり、生活環境や身体状況は刻々と変わってきています。句会に出席できないことが増えて、メール文音は私たちにとっていよいよ不可欠な実作のツールとなりました。仕事をこなしながら、健康の不調を抱えながら、また旅先でスマホで送受信しながらと、その時々の三者三様のやり方で。

三吟を始めた当初は巻き上げた作品を人に批評してもらう機会と度胸が見つからず、自己満足さえ頼りないものでした。連句大会などに応募して評価してくださる方があると思えるのはとても大きな喜びで励みになります。

事務局だより

●既往の行事

・令和三年四月二十三日、江東区芭蕉記念館にて第百五十五回猫蓑会例会を開催。当日の作品は、前年の亀戸天神社藤祭正式俳諧に予定された正式俳諧二十韻とともに天神社に奉納しました。当日の作品と正式俳諧は今号に掲載しています。

・令和三年六月二十七日、新宿ワシントンホテル新館にて第三十一回猫蓑同人会を開催。

・令和三年七月二十一日、江東区芭蕉記念館にて第百五十六回猫蓑会例会（猫蓑会総会）を開催。

・令和三年十月二十一日、江東区芭蕉記念館にて第百五十七回猫蓑会例会（芭蕉忌）を開催。

・令和四年一月二十三日、アルカディア市ヶ谷にて第百五十八回猫蓑会例会（初懐紙）を開催。

●今後の行事予定

・四月に、第百五十九回猫蓑会例会（亀戸天神社藤祭例会）開催予定。藤祭が中止の場合は、昨年同様に別会場にて春季例会開催。

・六月二十六日（日）に第三十二回猫蓑同人会開催。

・七月二十一日（木）に、江東区芭蕉記念館にて第百六十回猫蓑会例会（猫蓑総会）開催。

●猫蓑会リモート（Zoom）連句会

・昨年四月十一日に第二回開催、偶数月第二土曜日（原則）に開催し、今年二月に第七回を開催。第二回から第四回までの作品は今号に掲載しています。

●会員の受賞

・令和三年第二十五回えひめ俳口全国連句大会

松山市文化協会長賞
　歌仙「猫車」　捌　鈴木千惠子
俳口賞
　歌仙「緑陰に」　捌　高塚　霞
俳口賞
　歌仙「天平の鴟尾」　捌　橋本枯野
以上三作品は今号に掲載。

・第三十五回国民文化祭みやざき2020連句部門

宮崎県教育委員会教育長賞
　歌仙「海人の裔」　捌　石川　葵
日南市議会議長賞
　歌仙「紅兆す」　捌　西田荷夕
ジュニアの部・宮崎県連句協会奨励賞
　表合せ六句「ドレミファソ」捌　平林香織
以上六作品は今号に掲載しています。

・第三十六回国民文化祭わかやま2021連句部門

一般社団法人日本連句協会会長賞
　二十韻「五殿の千木」　捌　白崎ひろ子
和歌山県の連句を育てる会会長奨励賞
　二十韻「初日の出」　捌　杉本　聰
ジュニアの部・文部科学大臣賞
　表合せ六句「三が日」　指導　鈴木千惠子
以上三作品は次号以降に掲載予定。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・名本敦子様　令和三年四月　一万円
・三木俊子様　令和三年七月　二千円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
　猫蓑基金　普通預金　3376045

●新会員

・伊藤江灯（東京都）　令和三年四月入会
・植田円水（石川県）　令和三年四月入会
・小川さより（東京都）　令和三年四月入会
・田中祥子（北海道）　令和三年四月入会
・和田裕介（大阪府）　令和三年十一月入会
・福岡京子（愛知県）　令和四年一月入会
・井上里美（東京都）　令和四年一月入会

●会員の訃報

・猫蓑会設立主宰、故東明雅先生夫人で、猫蓑会顧問の東郁子様が令和三年十月に永眠されました。享年百一歳でした。謹んでご冥福を祈ります。

・愛知県日進市の武村利子様が令和三年七月に永眠されました。謹んでご冥福を祈ります。

●前号訂正

・前号、第百十四号2ページ「馬を止めた話」と「夢まぼろし」の転載元を、『雲云』誌の平成二年の号としていますが、令和二年の間違いでした。お詫びして訂正します。

季刊　『猫蓑通信』第百十五号
　令和四年二月二十五日発行
発行人　猫蓑会　青木秀樹
事務局　佐々木有子
　〒161・0033
　東京都新宿区下落合4・9・34・313
編集人　鈴木了斎
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千惠子・武井雅子・平林香織・御園魚彦
　（五十音順）
印刷所　印刷クリエート株式会社